

# ナイアガラタイムス

2025年4月10日 第15号

人 力 夢



## 目次

<b>アリスの事</b>	<b>…2</b>
<b>板さんと玲子先生の話～滝とアートの思い ～金子光史さんインタビュー～</b>	<b>…3</b>
<b>クレーフの話</b>	<b>…7</b>

## 『アリスのこと』

滝は、子供の頃から夜遅くまで起きていられない。最近は晩ごはんを食べたら、8時前にはくたくたになって寝てしまう。この頃、小さな文字を見るのが面倒くさくなってきた。57才、いつまでも若くいたいのだが…。

それから滝は、ませガキだった。中学3年から5年半、彼女がいた（けれど交際したのはこれを含めて2回しかないのだが）。

実家の滝の部屋は、電話の近くだった。寝た後に彼女から電話があると、おふくろが襖を開けて「まりちゃんから電話だよ」と言って、布団から出ていくことがあった。いつかは、彼女に「寝てた？」と聞かれると「起きてるよ」と言っても「声が寝てる」と言われたこともあった。しっかり寝てしまい、電話に出られないこともあった。

これは、その電話に出られなかった時の話だ。

高2の秋、彼女から夜、電話があった。滝は例のごとく寝てしまっていた。彼女はライブに行きたくて、おふくろが介助者になって、3人でライブに行く話をうまくつけたようだ。

そのライブは谷村新司だ。

ライブ会場は、神奈川県民ホール。夕食は、その県民ホールの最上階公園が一望できる素敵な「英一番館」というレストランだった。

その14年後、彼女の旦那になる人が足立区から相模原に引っ越してきた。彼を横浜観光に連れて行った。滝は、県民ホールの上が、結婚パーティーにいいんじゃないかと思い連れて行こうとしたが、何故か彼女がNGを出してきた。理由を聞いたら「嫌なものは嫌なの」と言うだけだった。それはきっと、滝がレストランを出た所で初めて「かわいいよ」とか言ったからかな？

さて、本題の谷村さんの話をしていきましょう。60代以上の方だったら知ってると思うが、アリス、滝は大好きだった。

アリスは谷村新司、堀内孝雄、矢沢透、3人のバンド。72年にデビュー。はじめの5年くらいは下積みが続き、ウッディ・ウーというグループの「今はもう誰も」という曲をカバーし、そこから徐々に火がつき「冬の稲妻」でメジャーなバンドになっていった。

滝は、ライブアルバム「栄光への脱出」を聞いて、心が暖かい人達だなと思い、好きになり、そこからニューミュージックにはまっていった。

アリスは、2022年デビュー50年を区切りにし、これから10年間アリスの活動をしていくことにした。けれど、

それが叶わず、2023年10月8日、谷村さんが亡くなった。

レーベルは、それを追悼しアリスのアルバム16作品、谷村さんのアルバム15作品を復刻した。

CDショップがある駅が珍しくなった今の時代、こんなに復刻されるのはレーベルの谷村さんへの思いなのか、それとも僕らの年代だったら売れると思ったのか？でも滝は嬉しかった。

彼女に今、何故NGだったか聞いてみたいけれど、もういないからな。



## 『板さんと玲子先生の話～滝のアートの思い出～』

滝の中1、中2、高1の担任が板坂先生（教員同士では板さんと呼ばれていた。今日は滝も親しみを込めて、板さんと呼ぼうかな）。たしか石川県の生まれで、埼玉の中学で美術を教え、30歳の時に横浜市の教員になったらしい。

この先生はとにかくガラが悪かった。滝も毎日のように「このたわけ」と言われたり、何か失敗した時に「半ごろしにしてやろうか」と言われた覚えがある。そんな板さんは、大学では石像を彫っていたらしい。

滝の中学部では造形という授業があって、技術と家庭科と美術が一緒になっていた。滝はそのころタイプアート（タイプの文字を1コずつ、つなげていき絵にしていく）にはまっていた。よくやっていた。ある日朝の会の時にみんなに「コレは英史が何時間もかけて打ったものだ、すごいよね」とほめてくれた。学生時代、美術だけはなぜかほめてもらえた。

1年の時は木で箱を作り、その周りにろうけつ染めの布を貼る。この箱を作ることで美術、技術、家庭科が一緒になっているということだ。滝はそのろうけつ染めの下書きになるものをタイプアートで作って、そこに流し込んでいった。

この箱21歳頃まで、ゴミ箱として使っていた。

ここでは板さんとの思い出を3つ書いてみる。



### エピソード①

中の修学旅行は東京で、板さんが（中2の時）、修学旅行のコースを決めた。ちょうどその時ミレーの「晩鐘」が上野の西洋美術館に来日する時で、板さんは美術の教師らしくコースに西洋美術館を入れた。けれど、板さんは高等部に異動になって、その日は高等部の修学旅行で京都にいた。滝はミレーよりもクールベの「波」とか「雪の中の鹿の戦い」の方が臨場感があって好きになった。

### エピソード②

中3の造形の時間にゴッホとかモネとか印象派の絵を鑑賞する時間があった。

滝はゴッホが好きになった。

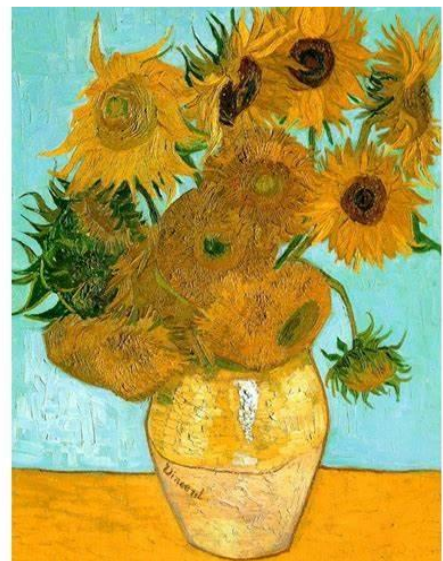
高等部に上がって、美術の時間に絵を見たいと言ったら板さんが、オマエはどうせ女の裸が見たいだけだろうと1回もそんな時間をもうけてくれなかった。

### エピソード③

高等部に上って1年と3年は美術の時間が取れた。

美術の時間ではクレヨンで花瓶の絵を描いていた。

（それしか覚えていないんだが）ほめてくれながら滝も一生懸命描いた。授業が終わると板さんが洗面台で一生懸命手を洗ってくれた。



2週間ぐらい前、おふくろに聞いてみたら、木の箱も花瓶の絵も実家にあるみたいだ。板さんは現在76歳。お元気かな。

この頃の絵に対する思いは30歳くらいまで残っていた。

28歳の時から「きこり」という作業所に3年間通っていた。そこでは月に1回絵画教室があり八王子からBMWに乗って、50代前半の竹内玲子先生が来てくれていた。(先生はきこりがスタートしてから17年半絵画教室を担当していた)

滝はクレヨンで絵を描くのが好きで、それだけでいいのに竹内先生はその上から絵具を塗った方がいいと毎回言っていた。いつかなんて、絵具を塗ったせいで形が崩れてしまい「どうしてくれるんだ!」ということになり、先生はその上からもう1回輪郭を描けばと言われるのだが元に戻らず滝は怒った記憶がある。そんなバトルは結構あった。

それからもうひとつ、先生は1回絵を描きだしたらやめることをゆるしてくれなかった。そういうものかと思っていたが、10年くらい経った頃にたまたま中学の美術の先生に会った時、そのことを聞いてみたら生徒に対してそんなことは言わないと言われた。やっぱり竹内先生は厳しかった。

先生が葉山に引越すので、きこりを離れることになった。最後の絵画教室の日、辞めてから6年以上経っていたけれど、その日だけきこりに行った。

先生は、「大滝さんは花瓶をしっかりと描いてくれました」と言ってくれた。

それから先生の送別会で橋本に中華料理を食べに行った。冬場で空が青かった事は今でも覚えている。

竹内先生は80歳の今でも絵を描いていらっしゃる。

この体験から絵と滝とのつながりは現在に至る。そしてまた縁を感じた方が金子さんである。ここで2年前に金子さんご本人から伺ったこれまでの事と現在の思いを書いてみたい。

## 以下、金子光史さんのインタビュー

### 【障害がある人達との出会い】



大学を卒業して何ヵ月かブラブラしていた。当然のごとく、どこかで働かなければならなかった。そんな時、新聞の小さな記事で障害者更生施設職員募集が目に入った。場所は青梅の山奥。そこに二年間いた。彼らと一緒にメシをつくり、風呂に一緒に入り背中を流しあい、陶芸をしたり、冬になると枯れた葦原を刈ってすだれを作ったり。そういう生活をしてきた。それは、社会に出ようとしている自分にとって経験したことがない時間だった。障害がある仲間達もストレートに接してくる。そんな彼らを見ているうちに私は

「なんて真っすぐな表し方なんだ」と思い、障害がある人達と生きていきたいと思った。だけど、20代になったばかりの自分が、その施設で職員として30年40年勤めるというイメージは持てなかった。ならば、なにをしようかと考えた時、教員になって自分の思いを確かめながら深めていきたいと思うようになった。

## 【心が通じ合えた】

私が教員になって関わった生徒達は、言葉とか行動で自分の気持ちをうまく表せない人達が大半だった。自閉の強い女の子がいて、不安になると周りの人をガーってひっかく子だった。私も随分ひっかかれて傷だらけになった。あれって結構膿んで、治らないし大変。その女の子が落ち着かなくて困っていて、どうしたんだろうと思っていた。



そんなある日、朝の会の時、突然立ち上がって教室を飛び出して図工室に入っていった。そして棚にあるクレパスの箱を取り出して、そのクレパスの箱のフタの裏に線を書き始めた。それを1時間ぐらいやって帰ってくる。帰ってくると落ち着いている、そういう事が続いた。だからもう止めないで図工室に行くという事自体はいいとした。

彼女が朝の会に落ち着いて座ってられないというのは、なにか理由がある。我々はそれに気がつかなければいけない。彼女にクレパスと画用紙を渡しても描こうとしない。

やっぱり図工室に走って行ってクレパスの箱のフタの裏に描く。それは何故かと考えてみた。そしたらクレパスの箱のフタの裏にフチが付いている。そこに当たってガッガッって戻ってくる、その繰り返しは彼女には爽快だったのだろう。それは画用紙だったら味わえない。その行為によって自分自身で思いとかエネルギーをコントロールしているようだった。クレパスのなめらかな感触と返ってくる繰り返し。そこに彼女の思いがあったと思った。

それが分かるようになったのは、彼女が図工室に向かう時、そっと私も黙ってついて行って、彼女の横でクレパスの箱を出して同じように描いてみた。最初は「出ていけ」という素振りをしていた。それが2～3週間経ったある日、彼女が後ろにきた私にクレパスの箱を渡してくれた。それで私も一緒にバーって描いて一緒に帰ってくる。初めて彼女が私の事を受け入れてくれた。

《これは金子さんがお話しして下さった中でも滝のお気に入りです。これは学研から出版されている「アートびっくり箱」という本のP13に掲載されているものです。これはアートを障がいがある人達とやっていく為のアイデアがいっぱい詰まっています》。私はこの事があってから、人によって表現は、こういう環境の中で描けると思った。



その時に一人一人の表現というのは、たとえば線を一本描くにも箱じゃないと描けない時もあるし、画用紙で描ける時もあるし、指でガーって引っかけて描く時もあるし、いろんな表現がある。アートは一人一人のその時に合った紙とか画材とか、もしかしたら破りたいかもしれない。そういう物をこちら側が見つけて、その時の気持ちを表現してもらわないとならないと思うようになった。

それから私は授業の中で実践していくようになった。たとえば雑巾を丸めて大きいものを持って両手で描く人もいれば木の棒の先端に雑巾を丸めて大きな筆に絵の具を付けて描く（その時はチラシなどを繋ぎ合わせた大きな紙が必要になる）。要するに学校で用意されたクレパスとか画用紙とか机の大きさでは表現出来ない人達がいるということを段々思うようになった。

## 【フェースオブワンダーについて】



あるダウン症の生徒は、三年間ほとんど、ほかの授業には出ないけれど、美術の時間だけは一番に来ていた。教室にいるのは美術の時間と給食の時間と休み時間。ほかの時間は姿を隠す。彼が学校を卒業してから「絵を描きたい」と言いだした。ほかの絵を楽しんでいた人達も卒業したら、家と作業所の往復だけで、そういう時間がなくなっていた。私も「彼らは、あんなにいい顔して生きていたのに、どうしたらいいんだろう」と思い始めていた。

「もう一回、絵を描いてみるか」と5～6人に声をかけて「じゃあ絵を描く場所をつくろうよ」という事になった。活動できる場所を色々を探したが条件に合うのがなかなか見つからなくて困っていた。

そんな時、プラスアルファという出来たばかりの作業所の人々が夜だったら空いているから使っていいよと言ってくれた。夜の作業所にみんな集まって、

音楽をガンガン流して、ガス台を使ってラーメン作って晩メシを食ったりした。絵の具も自分達で持ち寄って、段ボールとかチラシの裏に描いた。それがフェースオブワンダーのスタート。段々、そこを手伝ってくれる先生とか地域の方達が増えてきた。それで「なにか会の名前を付けるか」という事になった。ある人が電話でセンスオブワンダーって言ったのをフェースオブワンダーに聞き間違えた。「センス」と「フェース」を聞き間違えたのだ。センスオブワンダーとは、かなり昔「沈黙の春」という環境破壊問題をテーマにした本の著者レイチェル・カーソンが書いた本。そのイメージが私のどこかにあったかもしれない。

メンバー達は仕事が終わると、コンビニでおにぎりやカップラーメンを買って夜の作業所に集まってくる。集まるのが楽しい、絵を描くのが楽しい。そういうところから、ワンダーを訳すと「面白いとか変な」に訳せる、フェースが「面々」と訳せるから「面白い面々」まあいいかと思いフェースオブワンダーという名前を付けた。

## 【これからについて】

そういう物をどこか一ヶ所に集めたら面白いじゃないかと思って去年(2022年)初めてフェースオブワンダーの世界というイベントを開いた。

それぞれのメンバーとか、地域の方達も会った事がない。それが年に一度集まってアートの森で遊んだりする場として開いた。ただしアートの森は障害を持つ者だけじゃなくて、私が知っている絵描き達(表現者達)も、私の思いを共有してくれるなら一緒に出展してもらいたいと思っている。

アートの森というのは、私の思いを越えてもっと豊かな物を持っているはずだと思っている。だから詩でも映像でもいい。それを相模原や町田に広めていきたいし、地域や学校に作っていきたい。

## 『クレープのこと』

20年前の夏、400キロ離れた地方都市から戻ってこようと考えていた滝に「帰ってくるんだったら空いている部屋があるから住んじゃえばいいじゃん。」と言ってくれ、淵野辺駅近くの借家に住んだ。その裏にはコンビニがあった。

暑い日、ヘルパーにビールを買ってきてもらったり、店長に買ったものを食べさせてもらったりした。そこに売っていたのが、今でも大好物のチョコバナナクレープ。店員さん達とも仲が良かった。特に小沢さんという店員さんとは仲が良かった。

ある日、東林間の病院に通院した時、帰ってきてから昼御飯の介助のヘルパーは頼んであったのだが、帰ってくるのが遅くなってヘルパーが帰ってしまった事がある。

そんな事もあるかと思い、その朝、店長に相談してみたら「小沢さんだったら大丈夫だろう。」と言ってくれた。案の定、病院から帰ってくるのが遅くなって、一緒に行ってくれたヘルパーは仕事があるとさっさと帰ってしまい、頼んであったヘルパーも帰ってしまい、介助してくれる人が誰もいなくなってしまった。

それで、コンビニに駆け込み、小沢さんに頼んでみただが見事に断られた。

「買い物に関係する事だったらお手伝いできるけどそれ以外の事はたとえお店がすいていても出来ない」と言われた。そのあと「だから私は義理のお母さんの介護が出来るんだ。」とも言われた。

これは、今でも意味が分からない。多分、筋が通らない事は出来ない性格だからという意味かな？。その小沢さんとは本当に仲が良かったからこそ言ってくれたのかもしれない。

人が困っている時に手伝える事は大事な事だと思うのだが。

滝がそこに住んで5年経つ頃、そこが店じまいする事になった。ATMが外され、少しずつ物が減っていく。あれは本当に寂しかった。

10年前に引っ越した今の家の近くにも同じコンビニがあり、その店長とも気心がしれている。最近の出来事の一つ。カラのペットボトルが必要だった滝は店長に頼んだ。店長はきれいな1ℓのペットボトルを持ってきてくれた。けれど滝が必要なのは500ml。店長はしかたなく「絶対に洗ってね」と言いながら、ゴミ箱から出してくれた。これも気心がしれているからだ。

そろそろ、ウチの法人の今年のカレンダーの最後のページに書いてある言葉の説明をしていきたい。

6年前の2月、朝から嘔吐があり、電動車いすで40分かけて病院に行った。病院の人に頼んで事業所に休みの電話をしてもらった（どうやらこの時、事業所の職員が4日間休んでくれと言ったらしい。そんな事、滝は知らない）。一応インフルエンザの検査をしたがマイナスだった。

帰ってきてから、ヘルパーに来てもらい、着替えだけを介助してもらい、これで2~3時間寝れば治るだろうと思いベッドに入った。ところが、治るところか熱が上がってきたようで、看護師を呼んで相談したところ、やっぱりインフルエンザじゃないかという事になり、今度はヘルパーの車でもう一度病院に行った。結局、インフルエンザはマイナスだった。

その帰り道、コンビニに寄り、ヘルパーに大好物のクレープを買ってきてもらった。それを晩ご飯の代わりに食べ、10時間1回も目が覚めずに、寝て起きたら体が軽い。治ったのだ。

その日は、半日だから仕事に行こうと思い、車いすで50分かけて事業所に行った。事業所に着くと若い男の職員が出てきて「昨日、病院の人に4日間休めと伝えてもらったはずだ。帰れ」と言われた。滝は50分かけて行ったのだ。簡単には引けない。その足で病院に行き、診断書のような物を書いてもらい、また事業所に行ったが、今度は施設長に「保健所に言われるから帰れ」と言われた。これは諦めるしかないと思い橋本に「七つの会議」という映画を見に行った（この映画はネジが原因で社会が狂っていくという映画だ。機会があれば詳しく）。

その時、面白い出会いがあった。それは映画が終わった2時頃お腹が減ったので、映画館にあるモスバーガーに行き、店員に食べさせてもらおうと思ったが、横から「私、八王子でヘルパーをやっている者です。3時から映画に間に合えば、お手伝いしますよ」と言って下さり、「EXILEのコンサートに大阪までヘルパーの仕事で行ってきたんですよ」と話しながら介助してくれた。



その翌朝、目が覚めた瞬間、「事業所を辞めよう。7年半通って色々我慢してきたが、もうダメだ。」と思った。その事業所を辞め、一百に来る事になった。

## 編集後記

本当にご無沙汰してしまいました。

滝自身、ナイアガラの発行はもうありえないと思っていました。

理由は軽いうつだったのかな。

3年前の夏にコロナにかかり、それから気持ちが上がってこなかった。そして、一昨年  
の夏頃、それが酷くなり、自分が何のために生きているのか、生きている価値があるのか分  
らなくなったのです。けれど、食欲もあるし眠れるし何だろうと思っていた。そんな毎日  
でした。

それで、去年10月、ちょっとした交通事故にあい、そのあと、トラブルが続き、このまま  
じゃいけないと身体が思ってくれたようで、抜け出すことが出来ました。

この3年間、元に戻ると信じてサポートしてくれた周りの人達には本当に感謝です。

モノを書くという事を滝は40年くらいやっているのですが、いつも書く前は「なにも浮か  
んでこなかったらどうしよう」という怖さを感じています。

けれど、書いているうちに色々なこだわりが出てくる。ある人からは「滝さんは、書く事  
が好きなんだよ」と言われ、確かにそうかもしれないと思いました。だからきっとこれか  
らも書き続けていくのだろうなと思っています。宜しければお付き合いをお願いします。

このナイアガラが届く頃には桜も咲き暖かくなっている事でしょう。

春を満喫していきましょう。

### 発行所

〒252-2042 神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

### 発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5



感想などのメールはこちらまでお願いします

振込先 フク)アトリエ ゆうちょ銀行 ○九八(098)

店 普通 1208349 記号番号 10960-12083491

読んでみて『面白い』と思ったら振り込みをお願いします。

メンバーの工賃になります。